

理事長中尾武彦の



諭吉先生に叱られる

みずほ総合研究所 理事長 中尾武彦 2020年9月2日

諭吉先生、日本の発展に感心する

1万円札の肖像は2024年度に40年ぶりに福澤諭吉から渋沢栄一に代わる。福澤諭吉（1835年～1901年）は日本の近代化を象徴する思想家であり、教育者、実践者だ。1868年の明治維新の前に、3度欧米を訪れ、洋学を学ぶ塾として慶應義塾を開き、維新後は時事新報を発刊し、自由民権運動にも影響を与えた。日本では、今あたかも、コロナ禍、多発する災害、各国の政治の不安定さ、低成長などが、「近代」社会に信頼を寄せてきた国民のなかに不安を呼び起こしている。もしも諭吉先生がお札の肖像から降りる挨拶がてらに現代の日本に現れたら、一体どんなことを言われるだろうか。

ベストセラーとなり、多くの日本人を鼓舞した『学問のすすめ』17編が出版されたのは、1872年から76年だからおよそ150年前、明治の近代化、西洋化が始まったばかりのころだ。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず、といへり」という最初の言葉は誰もが知っているが、改めて全体を読んでみると、これが想像以上に面白くてためになる。明治の初年にここまで国際的な情勢を客観的に分析し、普遍的な道理を説くことができたことに驚かされる。

諭吉先生が今の日本を見て、感心することはもちろんたくさんあるだろう。「西洋の文明は、我が国の右に出づること必ず数等ならん」と言っていたときと比べると、目に見える都市の様子、住宅、産業、交通機関が西洋諸国に勝るまでに整い、国民は健康状態がよく、食から衣、住にいたるまで当時には思いもよらないほど豊かで、福祉も行き届いている。諭吉先生が学問のなかでもそれまでの儒学の代わりに重視した「実学」、すなわち「究理学」（物理学）をはじめとする科学、地理学、経済学などが社会で広く学ばれ、研究され、実践されていることにも快哉を叫ぶだろう。何よりも、西洋の列強の植民地支配が広がるなかで、国の独立を維持することすら自明ではなかった日本が、第2次世界大戦という無謀かつ非人間的な戦争を経ながらも、世界の先進国として立派に独立していることを心から喜ぶに違いない。

諭吉先生、独立の気力の衰えを叱る

しかし、感心することばかりではなく、嘆くこともたくさんありそうだ。我々は諭吉先生に何を叱られるだろうか。1番に思いつくのは、最近の日本経済の低迷に結び付けて「人民に独立の気力」が弱まっていると思われるのではないかということだ。諭吉先生は、江戸時代の身分制度で閉じ込められ

て、「無気力」な状況に置かれていた人々のやる気を喚起し、学問をしてそれを実践すること、独立自尊の気概をもって各人が努力し、それぞれの能力に応じて商人、農家、学者、役人などとして活躍することを求めている。せつかく「農工商の三民は、その身分以前に百倍」しているのだから、このチャンスを生かせとはっぱをかけているのだ。

我々が今明治の人を思うときに、最初から進取の気性と勤勉の美德を備えていたと考えがちだ。しかし、明治の近代化が当初士族たちによって構成された政府によって強力に推し進められ、それが成功していたものだから、明治初年には諭吉先生によれば「人民は国の食客たるがごとし」の状態になっている。それでは国の発展はない。西洋の文明も、政府ではなく、人民から起こったとして、蒸気機関のワット、鉄道のステフェンソン、「経済の定則」のアダム・スミスを挙げている。政府の義務は、民間が行うことを妨げず、適切に行えるようにして、保護することであって、文明を進めるのは「私立の人民」だと言い切っている。諭吉先生の言葉は、明治の人々の心に強く響き、国民性にも影響を与えていったのではないか。

諭吉先生の1万円札が発行されたのが1984年、ちょうどプラザ合意の前の年だ。日本経済はその後バブル経済の最盛期を迎えたが、1990年代の最初にバブルがはじけたあとは、長い低成長、低インフレを続けている。日本の1人当たりGDPは、日本の金融危機の前の1996年には3万8000ドルで、米国の3万ドルを上回っていたが、2019年には日本の4万ドルに対し、米国は6万5000ドルと逆に大きな差がついている。このような経済の低迷は政府の不適切な政策がもたらしたと考えられがちであるが、その回復策についても、国民のなかに政府が何かをやってくれるのを待っている姿勢はないだろうか。

いわゆる「3本の矢」に多くの期待が集まるのを見ても、やはり政府頼みだ。財政政策が拡張することは民間に足りない需要を補う意味があるし、必要な経費を赤字国債で賄う必要がある局面もあると思うが、過度に依存することは、いわゆる持続可能性に加えて、長期的にはむしろ資源配分をゆがめ、民間の力を削ぎ、潜在成長力を弱める可能性がある。大胆な金融政策にも、同様の限界がある。3番目の矢は、民間企業や個人が真の実力を発揮できる社会を構築するための構造政策であり、進めていくことは大事だが、これをやれば一気に成長力が加速するというような施策があるようには思われない。

バブル後の低迷は、政策ももっとうまく対応できたかもしれないが、バブル崩壊で傷んだバランスシートの調整が長引いたことに加え、労働人口の減少、高齢化の負担、製造業における韓国や中国などの勃興、軍事技術から派生したIT産業や新しいビジネスモデルで行ってしまった米国との距離など原因はさまざまだ。簡単にこうしていればよかったということは言えないし、打ち出の小槌のような政策もないと思う。

一方、日本には、十分に経済的な価値、成果につなぐことができていない成長の種もまだ多く眠っている。国も規制緩和や研究、技術開発の支援などやるべきことはいろいろあるが、諭吉先生なら、まず、国民が今一度現実を直視し、「人民の独立の気力」を高め、必要な学問をし、創意を工夫し、活動を盛んにするほかないと叱咤するのではないだろうか。その意味では、最近の日本に、既存の枠組みに安住せず、新しいビジネスに挑戦をしようという若い起業家がさまざまな分野で出てきていることはよいニュースだ。

外国の模倣を叱る

ほかにも諭吉先生に叱られることはいくつかありそうだ。1つは、何でも外国から取り入れようとする態度だ。諭吉先生は、各国の習慣や制度は、それぞれの国土に長く根付いてきたものであり、他国のものを「取捨」についての十分な検討なしに採用するのは「粗忽」であるとしている。また、何でも西洋が上だと考える人々を「開化先生」と名付け、もしも日本人が鼻をハンカチでかみ、西洋人が紙でかんでいたら、開化先生は日本人は何と不潔だと非難するであろう、同じように、日本人だけが部屋や荷物に常に鍵をかけ、職人に何を依頼するときでも厳格な契約書を用意しなければならないとしたらどうか、と具体例を挙げて西洋礼賛を戒めている。3度も長期間にわたり欧米に滞在し、習俗を観察した諭吉先生ならではの客観性だ。

もちろん、外国から学ぶことは、どの国であろうと発展の基本だ。しかし、欧米の、しかも一部の国の一部の制度を取り出して、簡単にそれを模倣しようという傾向は今も日本に残っているのではない。例えば、米国のベンチャー・キャピタル、高等教育とそれを支える寄付金文化などは、富裕層、なかでも超富裕層の存在を容認する社会のあり方に結び付いている。有名大学が巨大な寄付金を行う卒業生の子弟を優遇していることはよく知られているが、日本でそのようなことが受け入れられるだろうか。また、米国流の企業のガバナンスをすべて取り入れたら、日本の経営は強化され、企業の競争力は増すだろうか。

ちなみに、福澤諭吉は「脱亜入欧」を唱えたと言われ、アジアを下に見て、少しでも西洋に近づくようにと考えていたと思われがちだが、まったくそうではない。諭吉先生は何より愛国者であり、国家の独立を一番に考えている。そのためにまずは、国民がそれぞれ「一身独立」しなければならない。古代から文明を誇ったインドが英国の植民地となって「英商」の利益に壟断されていること、強盛な軍事力を持っていたトルコも独立はしていても「商売の権は英仏の人に占められている」ことが頭にある。「国の恥辱とありては、日本国中の人民一人残らず命を棄てて」も一国の自由独立を守らなければならないと説いているぐらいだ。

同時に、国と国の間柄も本来同等であって、富強な国が弱い国に無理を加えるのは、力士が病人の腕を折るのと同様、許されないこととしている。朝鮮からの留学生を慶應義塾に積極的に受け入れ、近代化を支援しようとしたが、1884年の甲申政変に清が介入し、開化派の多くが処刑された。これに大変失望して厳しく非難し、そのようななかで脱亜入欧論は1885年に書かれた。諭吉先生が本当に対抗する必要があると考えていたのは西洋列強であって、アジアにはむしろ強い共感を持っていたと理解すべきだろう。

談話や演説の不足を叱る

もう1つ今の日本を見た諭吉先生に叱られそうなのは、率直に「談話」（ディスカッション）をし、「演説」（スピーチ）することがまだ十分に行われていないと思えることだ。諭吉先生は、学問は、読書をするだけでなく、物事をよく観察し、道理をよく考え、人と談話して意見を交換し、最後に自分の所見を演説として発表することが大事だと強調している。実際、1875年には三田演説館を落成

させている。「巧言令色は仁少なし」というような、言葉数が少ないほどよいというような伝統を嫌い、しっかりと自分の意見を話すことを求めているのだ。

また、物事に「疑い」を持って真理を追究することこそが文明を発展させるとして、ガリレオ、ニュートン、フランス革命や米国の独立を例に挙げている。今で言うクリティカル・シンキングだ。外国の模倣だけでは困ると上に述べたばかりだが、これらの点では、諭吉先生も日本がもっと西洋の伝統を見ならうようにアドバイスするだろう。

諭吉先生の人間性

最後に、私が諭吉先生に叱られてみたいと思ったのは、その述べるところの説得力もさることながら、人間性に心打たれ、信頼するからだ。経済学者の宇沢弘文も諭吉のリベラリズムの思想を高く評価していたが、それにまつわるエピソードを紹介している（『経済学と人間の心』）。諭吉が最初の訪米で咸臨丸に乗り込んだとき、若い水夫2人と親しくなったが、厳しい階級制のもとで彼らがあまりにも酷い待遇を受けていることに憤慨し、自分の仕える正使の木村撰津守と大喧嘩をした。水夫の1人はサンフランシスコに着いたときに亡くなってしまったのだが、諭吉はその水夫のお墓の設計をするために同地にとどまり、完成を見届けてから使節団のあとを追った。数年後に再び訪米使節団に加わったときも、わざわざ一人サンフランシスコに寄って、その水夫の墓参りをしたというのだ。

諭吉先生は『学問のすすめ』のなかで、女性の地位向上についても多くを語っている。女性が男性に従属するような儒教の『女大学』のような考え方、一夫一婦制を逸脱するような習俗を激しく攻撃しているだけではなく、英国の思想家ミルの『婦人論』を引いて「男子は外を務め婦人は内を治むる」というような習慣も絶対的ではないとしている。自分の私生活においても、ともに4男5女をもうけた夫人を終生敬愛し、家族を大切にした。諭吉が亡くなったとき、三田の自宅から麻布善福寺までの沿道を1万5000人の人々が埋めたが、そのなかに他の葬式にもまして多くの女性が諭吉先生を見送ったと伝えられている。

●当レポートは情報提供のみを目的として作成されたものであり、取引の勧誘を目的としたものではありません。本資料は、当社が信頼できると判断した各種データに基づき作成されておりますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。本資料のご利用に際しては、ご自身の判断にてなされますようお願い申し上げます。また、本資料に記載された内容は予告なしに変更されることもあります。なお、当社は本情報を無償でのみ提供しております。当社からの無償の情報提供をお望みにならない場合には、配信停止を希望する旨をお知らせ願います。